

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.212

2021.5.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第39回 ● 宝ヶ峯に至る途：命名「宝の峯」

濱田耕作が坪井正五郎に論争を仕掛ける明治35年、八木榮三郎は人類学教室を離籍する。その後日露戦争を経、英国人医師ニール・ゴードン・マンローからの依頼により神奈川県の貝塚発掘を指揮する。「模様」形態学の学術的な余裕は失うものの、「コロボックル考古学」を踏まえ念願の層位区分による年代細別を導出する。明治38(1905)年～明治39年の横浜市三ツ沢貝塚では薄手式(堀之内2式～加曾利B式)と厚手式(勝坂式～加曾利E式)による石器時代上下層位区分と遭遇、続けて明治39年7月の川崎市南加瀬貝塚では上層に「中間土器の貝層」、下層に「石器時代貝塚」を検出する。

学史的な層位区分となる南加瀬貝塚は翌明治40年から4回連載して報告されるが、連載2回目に学史的層位区分が報告される(「中間土器(弥生式土器)の貝塚調査報告(248号の続き)」『東京人類学会雑誌』第22巻第250号)。坪井正五郎始め人類学教室での評価が芳しくないのは、連載4回目(『東京人類学会雑誌』第22巻第256号)に八木榮三郎が「予の主とする所は馬來族と中間土器との關係」(ゴチック体は引用者)との持論を展開したからであろう。

学史的な画期となる層位区分も決して完璧とは云えない。南加瀬貝塚では弥生式土器より古い石器時代土器を示したに過ぎず、弱点は全ての石器時代土器との層位区分を保証するものではない。批判は世の常であり、「コロボックル考古学」との論争から退場した濱田耕作は、遅れを取りながらも国府遺蹟調査で南加瀬貝塚の成果を追認するも、寧ろ弱点を誇張する。その結果、石器時代土器の層位区分を経ず、国府遺蹟の「原始縄紋土器」と「アイヌ縄紋土器」の年代細別を仮想し、「アイヌ縄紋土器」と弥生式土器の並行説を唱導すれば、その願望は九州島の中山平次郎まで伝染する。

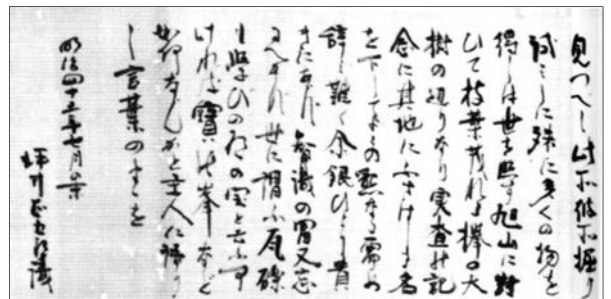
尚、縄紋式土器の次に弥生式土器の年代細

別が続く層位的な所見は長谷部言人が大境洞窟で導出(松本彦七郎は成果を紹介)し、続いて山内清男が大洞貝塚で縄紋式土器の終末を決定することにより両者の統合が図られ、学史的に真の縄紋式/弥生式編年が確立したのである。

閑話休題。八木榮三郎が南加瀬貝塚で弥生式の層位区分に成功する頃、坪井正五郎はカラフト研究、続いて諏訪湖ソネ湖底調査等に集中し、宝ヶ峯遺蹟と出会うのはその後である。明治43(1910)年4月、東北地方屈指の大地主である9代齋藤善右衛門が屋敷敷地内(当時は陸前田生郡前谷地村所在)で道路開削の土木作業中に多数の土器・石器等が発見され、直ぐに保存措置を講ずると共に10代齋藤善右衛門の協力の下、早くも同年7月には坪井正五郎の招聘が適う(財齋藤報恩会編(1991)『宝ヶ峯』所収日記参照)。そこで来訪記念として9代から遺蹟の命名を乞われ、後日(7月末付)「世に謂ふ瓦礫も學びの道の寶と云ふべければ寶の峯など如何ならんか」を要諦とする第44図の「坪井正五郎宝の峯命名書翰」を送付する。齋藤家記録の詳細は「宝ヶ峯」所収に従い、改めて人類学教室の活動としても坪井正五郎(1910)「〇机邊漫録 ●陸前の石器時代遺蹟」『東京人類学会雑誌』第26巻第294号に記事を遺す等、双方の思いの程が窺われる。更にその2ヶ月後にも7月30日付の河北新報の記事に則り、「宝ヶ峯は本名を櫻ヶ峯といひしを太古遺蹟より種々の珍器を掘り出したればとて博士に命名を乞はれたるに依り斯くは改稱せられたる」(「〇陸前田生郡前谷地村及び附近の石器時代遺蹟に於ける坪井理科大學教授の調査」『東京人類学会雑誌』第26巻第296号)と広報され、以後「宝の峯」は「宝ヶ峯」として定着する。

蛇足ながら「宝の峯」との比喩に一言付すれば、明治42年の諏訪湖ソネ湖底遺蹟における「湖上住居派」(鳥居龍蔵『諏訪史』第一巻)の僅少かつ小片のみの薄手土器の印象が強烈で、その好対照からリップサービス等ではなく素直に「宝の峯」と表現されたのであろう。そして10代齋藤善右衛門の継続的な調査と資料陳列の公開性により、以後「宝ヶ峯」として多くの加曾利B式研究者等に周知されて今日に至る。

この「宝の峯」命名の翌明治44(1911)年、大野雲外は樺太(主に「オホーツク式」)と北海道・本州等の比較を「土器紋様の分子」と配置法レベルにより検討し、アイヌとの類似を説明する準備として「今の紋様の分子を比較して、其區別が出来得ざる程の類似を見出したれば」と紹介・強調する(「先住民製作の土器紋様の分子に就て」『人類学雑誌』第27巻第9号)。画工歴が長い大野雲外は、坪井正五郎の「コロボックル考古学」基礎トレーニング[発掘→標本整理→形態分類→報告]機会に恵まれてきた八木榮三郎や鳥居龍蔵とは異なり、遺蹟単位の「模様」実態を把握する経験に乏しく、画工特性領域で「分子」に集約される類似性をつつ。流石に坪井正五郎は翌大正元(1912)年に種族と「模様」に関する形態学の課題を平易に解説すると共に、「広く諸種族に関し此種の研究を行ふ様に仕度もの」(『人類学雑誌』第28巻第10号)と諭す。



▲第44図：坪井正五郎宝の峯命名書翰の一部(『宝ヶ峯』所収)

※巻頭連載は隔月です。次回は大村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 宝ヶ峯に至る途：命名「宝の峯」(第39回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第32回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第205回) 小田島賢 …3
■考古学者の書棚 『日本原始文化』 宮坂 清 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第32回) ————— 間壁 忠彦・間壁 霞子

7. 吉備真備の母「楊貴氏墓誌」の謎(1)

吉備真備について祖母ばかり長々と注目してきたが、実は彼の母の墓誌も江戸時代の享保13(1728)年に、現在の奈良県五條市で発見されていたのだ。それは「楊貴氏墓誌」として、20世紀の後半頃までは、真備の真筆で、彼の母に対する墓誌として著明な資料であって、疑う人もなかった。だが近年では、真偽不明の扱いといえる。本体は土製のいわゆる博で、厚さ約5.5cm、横約27cm、縦約21cm。これの片面に刻字されたもので、発見時には文字に朱が詰められていたともいう。文面は次のようなものであった。(「」は改行部分)

「**從五位上守右衛 士督兼行中宮亮 下道朝臣真備葬
亡妣楊貴氏之墓 天平十一年八月十日 二日記歳次己卯**」

内容は真備の当時の身分官位状況等にとって、全く矛盾するところはなく、江戸時代以来、当時の著明な文献に拓本と共に記載されているものが多かった。だが私も先のが国出土の墓誌を取り上げたとき、この資料に全く触れてない。それには一応理由があった。と言うのも、実は現在この墓誌の実物は、発見後、幾度か再埋納されたり取り出されたりしており、結局は紛失したということなのである。20世紀後半になって偽作説が強まっていたが、実物がないので、再度の検討も出来ないからだった。

実はこの偽物疑惑のきっかけを作ったのは、あの富比賣墓地買地券を承認された、若い日の岸俊男先生であったのだ。それは先生による、日本歴史学会の研究誌『日本歴史』150号1960年10月の「歴史手帳」欄に掲載されたむしろ小論といえる「楊貴氏の墓誌」であった。従来から楊貴氏とは、墓誌文面から母の出身氏と考えられ八木氏のこととされてきた。永く中国にいた真備が中国風になぞらえて、母を敬慕して八木を好字で書いたもの、その背後には楊貴妃の意識があったと言われていたのである。

ところが岸先生によると、現物がないことを前提として、唐の玄宗皇帝の寵妃楊氏に貴妃の位が授けられたのは、墓誌の天平11(739)年より後、天平17年に当たり、楊貴妃にちなんだものではない。またこの墓誌は多くの拓本は遺されているが、中には、模刻された版の拓もあるので問題がある。こうしたことを指摘された上で、しかし近いところに八木氏のいたことも示されたもので、こうした従来の説の矛盾点を指摘の上で、一方で八木氏も存在する実態との関係などを疑問とされて提示されたものであった。

同時にいま一つ示された疑点は、この墓誌の発見時にあった。実は、元禄12(1699)年に発見された真備祖母骨臓器が広く世に知られることになったのは、発見後30年ばかり後の享保12(1727)年になって、地元の領主であった板倉氏が、骨臓器を納める社殿を建て、保管していた地蔵院を因勝寺と改め「吉備公太夫人古冢記」を世に出したことである。これによって真備祖母骨臓器は、広く世間に知られる著明な資料になったとされる。楊貴氏の墓誌が、この本出版の翌年発見されていることも、疑問点に挙げられたのだった。

これに対し、当時天理参考館の学芸員であった近江昌司氏が、

自分も以前から墓誌類に興味を持っていたが、岸先生の論文に触発されて、としてやはり『日本歴史』221号(1965年12月)に「楊貴氏墓誌の研究」を発表されたのである。それは偽物ということ強調したものである。丁度この時、岸先生は自分の論文集の一つ『日本古代政治史』1966年5月出版の校正中だった。これには、先の先生のこの墓誌に対する論文も収録されていたので、その後近江論文を見ての追記として、かなり長い論及が加えられている。そこでは一応、近江氏の墓誌偽物説をも認めながら、地元八木氏の実在を改めて意識的に強調されている。これを読む者には、なお疑問を残されたものと思えた。

ところで近江氏の論では、楊貴氏墓誌の、遺された多くの拓本にあたり、どれが本来の拓か、模刻品の拓本かの別は、熱心に区別されている。現地も訪れ、出土地点や再度埋納された地点などについては、詳しい検討がある。それらによって近江氏は、かつてその地で、多くの博を伴った火葬墓の存在は承認している。しかしこの点は、多数出土を伝える博などは一切残っていないので、周辺での伝聞による認識に思える。近江氏はその中の博に、真備祖母骨臓器を知ったものが、楊貴氏墓誌を偽刻したというのが結論である。

その証明として、20世紀、昭和18(1943)年太平洋戦争中に岡山県で出土の、真備祖母骨臓器が出土した同一地点とも言える場所で発見された、博敷きに須恵質の大甕を被せた中に、火葬骨が存在していた事例を挙げているのである(角田文衛「備中国下道氏埜域に於ける一火葬墓」『考古学雑誌』34-4 1944年4月)。

だが、もし奈良で博敷きの火葬骨臓器が江戸時代に出土しても、この20世紀出土の博敷き火葬墓など知る由もないから、どこで吉備国の吉備真備と結び付けえるのか。いかに真備祖母の骨臓器が好事家の間で話題となっても、真備と結びつく手がかりはないはずだ。むしろ考古学者でもある近江氏は、真備祖母骨臓器の近くで江戸時代から出土していた、博に奇妙な文字のある遺物などの存在を知っていたので、思いついたのではなからうか。その一つには、先に取り上げた富比賣買地券も入っていたに違いないと思っている。次回以後は、そのあたりを少し詳しく述べたい。

間壁忠彦 略歴

1932~2017年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年	同上館長
1968~1998年	広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年	(財)倉敷考古館学術顧問

間壁霞子 略歴

1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年	中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 205

国泰寺跡 ～北海道厚岸町

小田島 賢

私が今回紹介する遺跡は、北海道厚岸町に所在する国指定史跡の国泰寺跡です。厚岸町は北海道東部の太平洋沿岸に位置する、人口9,048人、面積739km²の町です。厚岸町の海岸は断崖をなして、海に臨んでいる地形が特徴的です。そこに厚岸湾が深く入りこみ、海岸沿いを狭い低地が縁取り、厚岸湖が谷の奥に向けて広がっています。

厚岸は寛永年間(1624～1644年)東蝦夷地開拓の拠点として、松前藩により厚岸場所が開設されました。国泰寺跡は文化元年(1804年)から文化2年(1805年)にかけて建立された蝦夷三寺(有珠善光寺(伊達市)、様似の等瀨院(様似町)、厚岸の国泰寺の三か寺のことで、蝦夷三官寺とも呼ばれます。)の一つです。蝦夷三寺はそれぞれの宗派が異なることと、受持の範囲が地理的に定められているのが特徴で、そのうち国泰寺は現在の十勝総合振興局管内から根室総合振興局管内と国後・択捉島までを布教範囲とした臨済宗の寺院です。

国泰寺跡は当時の建築物はないものの、寺院創建当時のたたずまいを今に伝えるとして昭和48年(1973年)に国の史跡に指定されました。史跡地の内部には、六世住職香国が近隣六場所の有志の寄進を募って建てた仏牙舎利塔、近藤重蔵が色丹島から持ち帰った樹齢200年を越える色古丹松、天保元年(1830年)に本堂と庫裡を修復する際、当時アッケシ場所の請負人であった山田文右衛門が奥州石巻から移植したと伝えられる樹齢180年を超える老桜樹などの歴史的意義をもつものが多く存在しています。

また、寺院が伝承する歴代住職の記録である『日鑑記』は幕府の蝦夷地政策や異国船来泊などに関して触れた史料として著名です。このほか、持場内の各地域に住する武士や商人、出稼ぎ人などがみずから署名し寄進した大般若経600巻(現存しているのは469巻)は、辺境における仏教に対する意識を知る良質な史料です。これらをはじめとする国泰寺に関わる大量の文書・記録類、経典や器物類は、平成17年(2005年)に『蝦夷三官寺国泰寺関係資料』として国の重要文化財に指定されました。

国泰寺跡の発掘調査は、国泰寺本堂の改築に伴い、創建当時の国泰寺の本堂や庫裡の位置と規模を確認する目的で、昭和59年(1984年)に第1次調査が実施されました。この調査では、古地図や写真等から推定された地点を中心に240m²が発掘されました。その結果、第Ⅲ層から幕末から明治期の包含層が確認され



▲明治期における国泰寺境内(北大附属図書館蔵)



▲釧路国厚岸郡泰禪寺の真景(北海立志図録)

ています。礫の集中箇所が検出され、礎石とみられる平坦面を加工した円形の礫なども確認されています。1.5m²の範囲に広がる細かい玉砂利の集中も検出され、これは建物の入り口付近に相当するものと考えられています。そのほか、楕円礫と角礫の集中もみられており、これは『北海立志図録』に描かれた屋根石に相当するものと考えられ、本堂の解体工事の際に1箇所を集められたとされています。出土遺物は、当時の国泰寺において使用されていたと考えられる近世陶磁器類や古銭、金属器、鉄製品のほか、続縄文後半期に位置づけられる後北C2・D式土器が出土しており、国泰寺の建立以前からの人類活動の痕跡が確認されています。これらの遺構・遺物の中で最も集中した地点は、かつての国泰寺の庫裡付近であるとみられています。

この第1次調査の成果から、当時の国泰寺の山門や本堂は、現在の山門及び本堂から約90度向きが変わっていることが確認でき、土地利用の変遷がみとれます。

平成10年(1998年)から平成12年(2000年)に行われた、第2次から第4次調査では、創建当初の境内地の範囲を確認する目的で実施されました。第2次調査では現在の境内の北東側にあたる地点で溝状遺構が検出されており、これは明治期において境内へ向かうための道路側溝跡であると想定されます。第3次調査では第2次調査で検出された溝状遺構の延長された部分から、土留めの板が確認されました。明治期に撮影された国泰寺の写真を見ると、この土留め板は、境内に入る木製橋基礎の補強材であろうと考えられます。第4次調査では、第1次調査の北東側を調査し、およそ14mに及ぶ石の列や敷石が検出されました。この石の列や敷石は当時の国泰寺の板塀であると想定されます。

このように発掘調査がなされた範囲は史跡地のほんの一部であり、遺構や遺物も即座に機能・用途がわかるものもほとんどありません。しかし、『日鑑記』をはじめとする文書や当時の写真資料など、北海道東部においては比較的豊富に現存しており類推が可能です。考古学資料と文献史料をフルに活用して、今後も江戸期から明治期の国泰寺を中心とした北海道東部をとりまく世界の解像度を上げる作業を続けていきたいと考えています。

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは高橋美鈴さんです。

考古学者の書棚

「日本原始文化」

三森定男／四海書房(1941)

宮坂 清

学生時代、考古学史の大切さを説いていた恩師の教えから考古学史に興味を持ち、学史に関する概説書や古書を少しずつ集めていた。そんな本たちを活用し、さらに買い足しながら考古学史の勉強に本格的に取り組んだのは、諏訪考古学研究会の共同研究「藤森栄一の蒔いた種 今—縄文中期文化論を問う—」である。今回紹介する本は、その研究の中で見出した、藤森より前に縄文中期農耕説を論じたものであり、藤森が縄文農耕論を立ち上げる際に大きな影響を受けたであろうと、私が考えている書物である。

最初に、著者である三森定男という考古学者について述べる。三森定男は1907(明治40)年生まれで、藤森より4歳年上である。母方のいとこに中谷宇吉郎、中谷治宇二郎兄弟があり、三森は東京大学人類学教室で石器時代の研究を行っていた治宇二郎の勧めで考古学の道に入った(三森定男1994「考古太平記」『考古学京都学派』角田文衛編)。1929年京都帝国大学文学部史学科選科(考古学専攻)に入学し、浜田耕作のもとで考古学研究を始める。選科を修了したのち、立命館大学専門部文学科(国語漢文専攻、夜学)に入学し、昼は京大考古学研究室で考古学を研究、夜は教員免許を取るために夜学に通っていた。1936年には考古学研究会を創立し『考古学論叢』の編集にあたった。角田文衛は三森「教授が縄文文化の研究に精力的に打ち込んでおられたのは、昭和6年から16年にかけてのことであるが、著書『日本原始文化』は、そうした研究成果の上に立って日本の縄文・弥生文化を体系づけた労作であった」と述べている(角田文衛1983「解題」『日本原始文化の構造』三森定男著)。その『日本原始文化』を発表したのち三森は、民族学や人類学の研究に移り、1952年に北海学園大学教授に着任し1972年に退職、1977年69歳で没した。

藤森栄一は戦前、三森と親交があり、当時をこう振り返っている。「昭和初年、京都立命館大学に三森定男さんという考古学者がいた。今は北海学園大学の教授である。すごいファイターであった。私はよく徹夜でケンカのような論戦をした。この人が、森本六爾さんと考古学というのは編年学か文化学かという点ではげしいケンカをした。そして三森さんはその末、こん畜生というわけで『日本原始文化』(四海書房・昭和16年)という本を書いた。編年学でも、文化論を論ずればこんなもんだという気概にあふれた、今にいたる原始文化論としては最高級の名著である。それ以降、三森さんはいい意味の刺激、つまりケンカ相手がいなかつたのか、学は孤ならずの代表みたいである(藤森栄一1985「考古学への想い」『藤森栄一全集』15)。

ここにみられるように、藤森と三森は徹夜で論戦をする仲であり、その議論仲間の出した『日本原始文化』を「原始文化論として最高級の名著」と絶賛している。一時期ではあるが同士として過ごした三森から、藤森が多くのことを学んでいたことがわかる発言である。

加えて、藤森の弟子である河西清光の回想に『日本原始文化』についてふれた文章がある。昭和23年頃から藤森の本屋で行われた考古学の講座では、「縄文土器講座は、三森定男先生の『日本原始文化』で、『これは名著だよ』が口癖であった」という(河西清光1974「広がる輪」『信濃』26-4)。ちょうど藤森が縄文中期農耕論を発表し始めるころのエピソードであり、藤森が『日本原始文化』に多大な影響を受けたことがよくわかる証言である。

では、藤森が学んだ、三森の縄文中期農耕説とはどのようなものであったのか。最初に、三森が原始文化研究の前提としている、石器時代の発展段階を確認しておく。

三森は「我国原始の歴史を叙述するためには、一般国史と絶えず関連し規制せられるべきであると共に、世界史と関連し、歴史に於ける一般性を得ることに心がくべきものである」と述べ、研究対象が時間的・空間的に限られたものであったとしても「人類文化発展の一般性を逸脱するものであってはならぬ」ことを主張している。

そうした視点を明確にしたうえで「人類最古の階梯である石器時代を、さらに舊石器時代、中石器時代および新石器時代の三つに分けているが、この三時代は経済形態から、狩猟、漁撈及び農耕の三時代に大体照応する」と、石器時代の階梯と経済的発展段階の結びつきを述べている。ここで注意すべきは新石器時代を農耕の時代に位置づけていることである。では、新石器時代の農耕とはどのようなものなのだろうか。三森は以下のように農耕発生の契機と新石器時代の農耕のあり方を論じている。

「狩猟人達が居住空間を拡げたり、狩猟の便宜のために、森林を焼き払うと、焼き払われた土壌には草が以前よりも見事に生育することを発見したことだろう。採取していた穀草や球根はこうした土地に栽培され出したにちがいな

い。こうした農耕の階梯は一般に原始的な鋤耕の出現と一致する所からハック森林経済(Hackwaldwirtschaft)と称せられている。そのうえ、実際に森林地は、粗放的な鋤耕にとっては、火災による施肥が可能であるだけに、好適しているのであった。従って、ハック森林経済は狩猟経済から直接に発展して行ったものである。(中略)我国に於ける勝坂式遺跡は山間に殆ど限られている上に、精巧な磨製石斧(定角式)と石鋤と目すべき打製石斧の多くとをもっているのからすると、当然ハック森林経済の階梯にあるといつてよい」。

このように、縄文時代中期、伐採具である磨製石斧と石鋤である打製石斧を多出する勝坂式期に、焼畑による「原始的な鋤耕」が行われていたことを推定し、それを、エドアルド・ハーンによる農業発展段階の「ハック森林経済」に位置付けた。さらにハック耕が行われていた証拠として、石棒や土偶から想定される地母神信仰に注目し次のように言う。

「エドアルド・ハーンは、ハック耕と男根崇拜との関係を明らかにした。ハック耕は、生殖行為と比較され、大地は女性の局部であり、同時に力づくで孕ませられた女神である。土掘棒が男根に比較され、男根を象ったものが大地に立てられるというのである。山間にある縄文式遺跡から男根を象った石棒が数多く発見されることは、縄文式文化にも、すでに原始的なものではあるが、農耕が存在していたことが傍証されてくる」。

このように三森は、縄文時代中期の様相を世界史的な発展段階と対比して、農耕の存在を論じたが、その内容が、藤森栄一の縄文中期農耕論に非常によく似ていることに気づく。そしてそれは、単に似ているというのではなく、藤森が三森の考え方を大幅に取り入れたゆえであることがわかったのである。

ここで詳しくは触れられないが、『藤森栄一全集』第15巻に収められている、藤森が戦時中に戦地で構想したという「器具の発展について(草稿)」、「生産の形態について」という二つの未発表論文には、三森の『日本原始文化』の文章が原文のまま引用されたり、字句を変えて書かれているのである。とりわけ縄文中期農耕論の根幹をなす部分の記述は、ほとんど三森の文章によって構成されている。このように戦時中から戦後にかけて、藤森は三森の『日本原始文化』に学び、縄文中期農耕論立ち上げの準備をしていたのである。

あまり知られていないが、藤森が最初に縄文中期における農耕の可能性を語ったのは、1948年7月10日発行のスクール文庫版「石器と土器の話」である。そこで藤森は縄文中期についてこう語る。

「狩猟生活が主でなかつたとなると、土掘りの道具が多い。ではもう農業が始まっていたのですか。そうです。そうとしか考えられませんね。けれども、いまのような水田の稲作りではありません。畑作りです。柔かい泥地の田をつくるのに、なにも石の鋤はいらないでしょう。石コロの多い山畑、それも大木や根っこそのまま残った森林地帯のことですね。(中略)今でも、長野県の伊那谷の山部の地方ではやっていますが、焼畑というのを知っていますか」。

「…こうした有様で、これを学者はハック森林経済などと云っていますが、高地や山地の森林地帯に住んでいる原始人たちが、はじめて農耕をする一つの型だと考えています。こうした生活の過程が、日本でも中期縄文時代の生活形態として、始まったのだと私は考えています」。

「…そこで思い出すのは、未開民族の原始陸耕の文化人が、作物のふえることを願い、耕地の植えつけや種まきのときに、そのまわりでいろいろなお祭りや行事を舞踏のかたちで演じていますが、そうした例から考えてみると、中期の石棒はハック原始陸耕の発生とともににはじまった農耕信仰のあらわれではないか、と私は思っています」。

ここで藤森が言っている、焼畑、ハック森林経済、石棒農耕信仰説はいずれも三森定男が『日本原始文化』で論じているものであり、藤森が三森の縄文中期農耕説を取り入れたものであることはまちがいない。したがって、藤森が世に問い、論争を仕掛けた縄文農耕論は、藤森自身による縄文中期の文化要素の分析と、三森定男のハック森林経済による縄文中期農耕説を合成することで成り立たと考えることができるのである。

三森の『日本原始文化』がなければ、藤森の縄文農耕論は構想で終わったかもしれない。それだけでなく、藤森の歴史観さえちがったものになったかもしれない。本書は、藤森にとって考古学の土台を形成した、まさに「最高級の名著」であったのである。そして藤森栄一をキーマンとして考古学史を研究する私たちにとっても、本書は「最高級の名著」なのである。

アルカ通信 No.212

発行日 2021年5月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp